



## 大野一雄百歳記念ビデオ上映会記録

著者	ソルト ジョン, 田口 哲也, 萩原 健次郎
雑誌名	文化情報学
巻	3
号	1
ページ	25-31
発行年	2008-03-31
権利	同志社大学文化情報学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011737">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011737</a>

講演

## 大野一雄百歳記念ビデオ上映会記録



司会：田口 哲也（同志社大学文化情報学部教授）、詩朗読：萩原健次郎  
解説：ジョン・ソルト（ハーバード大学 エドウィン・O・ライシャワー日本研究所）

2007年10月11日に同志社大学学生支援センターと同志社大学文化情報学会主催のビデオ上映会が、ジョン・ソルト博士と米国の highmoonoon 社からのコンテンツ提供により同志社大学寒梅館ハーディーホールで行われた。以下はその折の音声の記録（ビデオ部分を除く）である。ソルト博士は源氏物語から北園克衛まで守備範囲は極めて広いが、大野一雄氏と四半世紀を超える交流を続け、特に日本が世界に誇る現代アヴァンギャルド芸術である暗黒舞踏の米国への紹介に尽力されてきた。2007年には大野一雄生誕百年を祝福する目的で、タイのバンコクのタマサート大学や米国の Tufts University や CUNY（City University of New York）などで7回のビデオ上映を行っている。当日のポスターを飾った写真は米国マサチューセッツ州のアーモスト大学での公演の折のものである。解説のなかにも出てくるように、敬虔なクリスチャンである大野氏は同志社の創立者である新島襄が学んだアーモストの地で踊ることを熱望されていたという。同志社大学ではかつて高木繁光教授などのご尽力により故元藤燐子氏の公演が京田辺キャンパスで行われたことがある。元藤氏は暗黒舞踏の創始者であった土方巽氏の妻であった。今回の催しをきっかけにして、同志社大学と文化情報学部が、この日本発の現代芸術のさらなる理解と研究の場として発展していくことを願う。なお、当日上映されたビデオは「宮田國男への鎮魂の舞踏」と「階段を降りる鶴」である。

司会：皆さん、こんばんは。本日は、よくいらっしゃいました。大野一雄さんという現在、101歳を迎えようとしている方ですが、お元気で、日本から世界に輸出できる唯一のアバンギャルド芸術、暗黒舞踏ですが、これを土方巽さんらと始められ、今日までずっと公演、ワークショップを続けて、今、世界的にアバンギャルド芸術家の間では大野先生のお名前は知らない人は、まず、いないという方であります。本日は WOT のプログラムの中に私たちの企画を組み込んでいただきました。2005年に京田辺に文化情報学部という新しい学部ができて、私どもの文化情報学会はそ

こを母体にしている学会です。従いまして、本日は文化情報学部、文化情報学研究科の先生方にも来ていただいております。

はじめに文化情報学会の会長であり、かつ文化情報学部の学部長である村上先生にご挨拶をお願いいたします。

村上学部長：皆様、こんばんは。本日の催しにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。ご紹介いただきました文化情報学部の村上でございます。本日は未公開ビデオの上映と講演、詩の朗読と、盛り沢山の内容になっておりますが、このような形にできましたのは、本日の司会の田口

先生のご尽力の賜物であり、かつ学生支援センターのご努力によるものであります。厚く御礼申し上げます。また、はるばるハーバード大学よりお越しいただき、ご講演を賜るジョン・ソルト先生、並びに詩人であられる萩原健次郎様に感謝申し上げます。

同志社文化情報学部は2005年に設置された新しい学部で、京田辺で教育を行っております。データサイエンスによる文理融合型の教育・研究を行っております。スタッフは25名で、理学部、工学部、文学部などの幅広い分野に渡って第一線の方を選び、文化事情を客観的に研究・解釈する学部として、来年度には卒業生を出すところまでまいりました。また今年4月には大学院の博士課程（前期）（後期）を設置して、すでに先端的な研究を行っている大学院生が在籍しております。

本日、ビデオ上映いたします大野一雄氏は、暗黒舞踏で著名な方ですが、この暗黒舞踏もまた文化情報学部において授業に取り上げております。学部の授業の中にプロジェクトと呼ぶ課題設定型の授業がございます。その中でかつて大野氏とともに暗黒舞踏の発展に大きく寄与した土方巽の舞踏のビデオを上映して身体と感性の関係を考えさせる講義などを行っております。このような授業も文化情報学部の特色の一つとすることができます。また大野一雄氏が特に欧米で評価されたという点に関しましては、本学部には比較文化論を研究されている田口先生がおられまして、また理系の教員ともども、その分析ができるという次第でございます。さらに申し上げれば、詩、和歌の分析ということも文化情報学部の研究の範疇でございます。本学部の福田先生は古今六帖の作品のデータを作成し、系統学的研究、意味論的研究を、理系の研究者とともに行っております。このような教育・研究を行っております文化情報学部といたしましては、本日の催しは学部の内容にふさわしいものであり、それを主催することができましたことは大きな喜びでございます。それでは皆さん、最後までお楽しみください。

**司会：**どうもありがとうございます。申し遅れましたが、私、進行役を務めさせていただきます田口と申します。よろしくお願ひします。舞踏についてはすでにご存知の方も、また今日初めて見るという方もおられると思いますが、これからご紹介いたしますジョン・ソルト先生は大野先生の舞踏に早い時期から着目されてきた方です。ハーバー

ド大学で北園克衛さんという日本を代表する世界的に著名なアバンギャルド芸術家、詩人の研究をされまして博士号を取得されました。たしか1981年だったと思いますが、ハーバードにお邪魔しました時、大野先生が初めてアメリカに行かれた時のポスターが壁に掛かっていたのを覚えています。アメリカでの公演の後、ソルトさんのお宅に大野先生がお泊まりになったと伺いました。大野一雄先生を30年前から、よくご存じの方です。その当時、舞踏は圧倒的なインパクトがありまして、京都大学の西部講堂などでも公演がありました。京都はアバンギャルド芸術の中心の一つのようなエリアでした。そういう時代もありましたが、その後、あまり知られないような印象を持たれるかもしれませんが、この時期には大野一雄さんの芸術が海外にもものすごい勢いで広がっていました。かなり初期から70年代以降、舞踏について大変詳しいジョン・ソルト先生をご紹介したいと思います。

**ソルト：**こんばんは。ジョン・ソルトと申します。日本語で話します。舞踏はなぜ、意味のある芸術か、どういう意味を持っているかということ、前衛芸術の中で、1913年頃から未来派、ダダイズム、シュールリアリズムなどが日本に入ってきて、日本人がそれを真似しているとよく言われてきましたが、舞踏だけは日本から始まって西洋に行った前衛芸術です。最近、アメリカの大学にアーティスト・レジデンスとして行った舞踏家の一人へのインタビュー記事が、ニューヨーク・タイムスに載っています。その中で「アメリカの舞踏に関してどう思いましたか？」と聞かれて彼はこう話しました。「アメリカの舞踏の97%は日本の舞踏の真似です。」西洋文明が日本に大量に流れ込んできた、そのようやく100年後、日本人は西洋人に向かって「日本の舞踏の真似です」と言えるようになりました。土方巽と大野一雄で始めた芸術ですが、今、世界中に、アメリカでも、タイでも、あちこちで舞踏に興味のある方が出てきてまして500人以上が活動しています。また大野一雄とご子息の大野慶人さん、現在69歳ですが、彼は10月27日、ニューヨークのジャパン・ソサエティで大野一雄の101歳の誕生日のために「無」とい新しい作品をプレビューします。大野一雄と大野慶人と土方巽、磨赤兒など、いろんな方々がつづってきた舞踏の芸術、このジャンルは非常に面白く、珍しい芸術です。

なぜかというとは舞踏の場合だけはダンスとしてのステップがない。動きがないんです。他は真似できる。こういうふうに動いたらというダンスステップがある。イザドラ・ダンカンでもステップを見て真似すればいい。舞踏だけは、そうじゃないんです。真似できるステップがない。何があるか。表情、顔のゼスチャー、それとまた自分の動きたいように動く。振り付けみたいなのは最初からはなかったけど、舞踏が洗練されていくにつれて、振り付けが出てきましたが、大事なそれはそれよりもなによりも自分の魂を踊ろうとしていることです。舞踏の歴史のなかで大事なのは次の点です。第二次大戦中、アメリカの原子爆弾をヒロシマ、ナガサキに受けて、敗戦後、芸術家たちは、「我々はこれからどうするか」と悩みました。戦前までは西洋の前衛芸術を採り入れてきたけど、西洋の人間や国によって日本はこんな状態になってしまった。だからそれを否定したかった。西洋はだめ。土方はバレエとか西洋的なものを否定しようとした。キリスト教会の上を見ると天国への針があるみたいだ。だが、天国への気持ちはどうでもいい。我々は地面にくっついている。それが舞踏の始まりだと。また同時に日本の伝統にも反対していた。そういうところから出発しようとした。面白いと思うのは、土方巽と元藤燐子、彼の妻でお亡くなりなる直前に同志社大学でも公演されましたが、その二人は若いときにお金もなく、何もないところから舞踏という新しいジャンルをつくりだしました。それはすごいことです。実は土方は東京の浅草で夜のストリッパーをしていた男です。それは男たち向けに。磨赤兒もそうですね。夜の仕事のために身体をきれいに保って練習した。また昼は舞踏をつくりだした。それが始まりです。また元藤さんはステージの舞台装置のためにベッドのシーツをとって切って使うとか、大変苦労されたようです。お金はないが、魂で動こうと思った人々がこの芸術をつくりだしました。

実は戦前のドイツのニュー・ダンスを学びに江口さんが向こうに行かれて、学んだものを日本に持って帰りました。また石井漠という前衛ダンサーも戦前に勉強しにいますが、彼は歳をとった時、目が見えなくなり、芝居でお釈迦様の役をしたそうです。その写真を見たことがあります。石井漠が土方と元藤と大野一雄の先生です。大野一雄は12年間、戦争中、フィリピンにいて、ひどい目にあいました、他の日本人と一緒に。

帰る船の中で日本人がたくさん死んで、死んだ人を船から海に投げたんです。クラゲが一杯死体に寄って来たそうです。その場面を何回も何回も見て、日本に帰った時、「クラゲ・ジャリフェース」という作品をつくりだしました。それが彼の舞踏の始まりです。土方巽と大野一雄は長く一緒に活動しましたが、他の舞踏家もいて、山海塾が多分一番有名になったと思いますが、それは3世代の舞踏家たちです。年譜もあります。

大事なは何もないところから、この舞踏が出てきたことと、そしてそれは日本が世界に与えることができる唯一の現代前衛芸術だということです。今夜、大野一雄の百歳をお祝いするために2本のビデオを上映したいと思っています。その一つは大野先生が87、88歳のときに老人ホームで自発的な公演をなさったものです。彼の舞踏はスピリチュアルなもので宗教的な面がある。哲学的な面も。土方巽は「舞踏自体には哲学がないんだけど、舞踏から哲学が生まれてくる可能性はある」と言っていました。

最初にビデオを上映してもらい、それから、それを見てくださった萩原健次郎さんが彼のリアクションを詩にして朗読してくださいます。その後、次のビデオについて話します。

司会：それでは最初のビデオに移りたいと思います。

(ビデオ「宮田國男への鎮魂の舞踏」)

暗黒舞踏は身体芸術ですので、言葉になる前の表現、フランスのラカンが「情動」と言っているような、言葉にならない世界を身体で表現する芸術と言うことができるかと思います。いろんな見方ができると思いますが、映像を見たというより、一つの体験をしたという感じが僕は正直なところしますが、皆さんが感じたこと、大野一雄先生の舞踏について質問を受けながら、ソルト先生にお任せしたいと思います。

言葉にならないようなものを人間は言葉にしたくなることがあります。そういう分野の芸術の一つに「詩」というものがあります。ニューヨークの在住の詩人で写真家のアイラ・コーエンという人がいますが、この人が「大野一雄は私のお母さん」という詩を書いています。アイラ・コーエンのご両親は聾啞者で、ことばが出ない、耳が聞こえない世界の人なんです。彼はそういう両親

と一緒に育ってきて、大野一雄の踊りを見てものすごく感動したそうです。そして詩人ですからその体験を詩にしました。（“Kazuo Ohno Is My Mother,” *gui*, Vol. 21, No. 56, April 1999, 115.）

これから次のパフォーマンスで萩原健次郎さんに詩を朗読してもらいます。ところで先ほどの映像の中で、赤い服を着て写真を撮っていた方は細江英公さんというカメラマンで、土方巽の故郷である秋田の農村を舞台に土方をモデルにして撮った「鎌鼬」などで有名な、国際的によく知られている写真家です。皆様のお手元にあるパンフレットの表紙の写真を撮られた方です。

萩原さんは京都市左京区が誇る偉大な詩人の一人です。和泉式部以来、京都には詩の伝統が連綿としてありますが、現代でも詩を書いて芸術の分野で貢献している人はたくさんいます。ただ、彼の場合は単に詩を書くだけでなく、それをさらに朗読することを自分のアートとしておられます。パリでも日本語の詩の朗読をされてきました。萩原健次郎さんに今晩は、今、見たビデオの、言葉になるのか、ならないのか、そのギリギリのところを詩にさせていただき、朗読していただきます。朗読というのは言葉を使って自分の身体を楽器みたいにして表現する一種の身体芸術で、半分かぶったようなパフォーマンスになると思います。萩原さんには別の顔がありまして広告代理店の社長でもあります。本業です。今回のポスター作成にあたってご尽力いただき、美しいポスターをつくっていただいています。それでは萩原健次郎さん、よろしくお祈いします。

萩原：萩原です。よろしくお祈いします。今の映像に沿って詩を書くというようなことをしたわけではなく、ビデオを拝見しまして、そこにすごいドラマがあるとか、ストーリーがあるというものではないんですけど、少し時間がたって、田口さんが体験と言われましたが、そういうことを私も映像を見たことで、時間をちょっとずらした時に反芻してやってくるという、そういうことを感じました。ストーリーとか、ある種の物語ではなく、大野一雄が身体で何か滲み出すといますか、溢れだすと言いますか、沸き立たせると言いますか、そういうものが、何か聞こえてくると思うんです。それは言葉かもしれませんが、言葉でないものかもしれません。詩を書くということも、どちらかと言えば、よく気持ちとか感情とか、心で書くとか言いますが、脳で書いてみたり、身体のどこ

か、手か足かどこかを捻り動かすことで、それがだんだん、だんだん言葉になってくるという、身体はどこから、あるいは言葉が出たから、浮かんだから身体が動き出すということもあると思うんです。

それで「ああ、悲しい」とか、そういうことは、一言で済むといますか、でもそれは全然真実でもないかもしれないし、でも何か、ああ、悲しいということを書きでずっと書いていく、あわーい、あわれ、あわーい、あわれ、むかーし、さみしかったこととか、そういうものが大野一雄という人の時間の中にずっと堆積された時間、あれは100歳から13年くらい前の映像ですけれども、堆積された時間が見えてくるような気がしました。

書いた詩は「鐘の着物」という詩です。カーン、カーンとなる鐘の着物。映像の中に、多分、あれはアルヴォ・ベルドの音楽かなと思うんですが、芭蕉の句に触発されて書いた曲で「鐘」がテーマになっていると思うんですが。大野さんが着ていた着物には鐘、音が染みついて、それを着ているようなことを感じました。

（朗読された詩は57～53頁参照）

司会：萩原健次郎さんでした。どうもありがとうございました。萩原さんのリアクションも含めて大野先生の踊りについてジョン・ソルト先生にお話を伺いたと思います。

ソルト：萩原さんの詩を聞いた時、大野一雄先生の悲しみのこと、悲しみの固まりはどういう過程で芸術になるか、というようなことを考えました。それは何かの治療みたいで、人をいい気持ちにさせるものか。また、それが魔術的な、巫女のようにシャーマンみたいな役割を果たしているような気がします。ただの悲しみに終わるのではなく、それを昇華して他の何かになっているような気がします。

先のビデオをごらんになった印象はどうでしょうか。舞踏を見せる時に、一部分、5分だけとか、それを見せるのは好きじゃないんです。作品1本全部見せないといけない。なぜかと言うと舞踏は時間を延ばしているんです。最初は皆さんがごらんになったように大野先生はゆっくりと動きました。途中で動きが早くなった時、彼が走っているみたいに見えますね。全部、相対的に見えますから、だんだん動きが速くなると、より速く見える。

それは最初からゆっくり動いているところから見ているのでそのように見えるのです。

もう一つ指摘しておきたいことは舞踏のアンコールのこと。普通は終わって拍手をして彼が出ればいいのに、出ないで、もう一回、もう一回と、だんだん雰囲気がよくってくる。皆が興奮するようになる。昔、大野先生の横浜の保土ヶ谷の家を訪ねた時のことです。「今度のアメリカのツアー、アーモスト大学で踊りたい」とおっしゃいました。なぜかという大野一雄は明治生まれのクリスチャンで、新島襄が大好きで、新島がかつて学んだアーモスト大学で踊りたいと。それで僕は公演をオーガナイズしました。

去年12月、大野一雄さんと慶人さんの家を訪ねた時のことです。「この1年間の間、百歳のお祝いをするためにあちこちでいろんな映画祭をするつもりです。バンコクとか3カ所でやりました。ロスのパサディナと、ボストンの大学とニューヨーク市立大学でまたやります」と、それを報告した時、「同志社大学でもします」と申し上げました。すると慶人先生は「ああ、いいですね。同志社は。どうぞ、どうぞ」と。それで喜んでここでやっています。

大野先生は自分のなさっていることについてしゃべったことがあって、面白いことがいくつかあります。その一つは「舞踏する時に私の衣装は宇宙です。だから宇宙を着て踊ります」と。もう一つは「この身体のトルソーと腕、足、頭だけで、どうやって人間と動物の世界を乗り越えるかということを考えています」とおっしゃいました。代表作が5つくらいありますけど、僕はそれを見ていただくよりも、こういう自発的な老人ホームでなされた時の方が、普段の公演では見られないようなものが見れて、いいと思いました。「未来にラ・アルヘンティーナ」とか、他の彼の代表作品が、どこかの映画祭で見られるようになると思いますが、これは多分、上映しないと思います。

もう一つ、老人ホームから精神病院に移りたいと思います。プログラムに書いてない作品を見せたいと思います。これは面白い作品ですから。内容はこういうことです。ある偉い先生が北海道に精神病院をつくりたかった。普通のところより優しく、患者に芸術をさせる。芸術は治療という感じで精神病院と普通の社会の橋渡しのようなところをつくったそうです。お金も集めてつくって、うまくいきました。その先生も一冊本を書いて前

向きな方でしたが、5年目、彼は突然、自殺しました。皆、びっくりしました。精神病院をつくった方が自殺したので、皆、わけがわからなくなってきて、三周忌の時、大野一雄先生に頼んで「供養として舞踏をなさってください」と。珍しい映像です。「階段を降りる鶴」の話です。

司会：フィルムフェスティバル風に。質問は後にして。二つ目の作品を見たいと思います。

(ビデオ「階段を降りる鶴」)

司会：商業施設では、こういう映像は見るのができないかなと思います。今となつては大野一雄のライブパフォーマンスは見ることは難しいかと思いますが、今日はそういう意味では、いい体験をさせてもらったと思います。ハーバードのライシャワー研究所からソルトさんに来ていただいているので、ご質問、コメントがございましたらよろしくお願いします。

質問(1)：音楽にあわせて踊ってらっしゃるんですか？

ソルト：音楽が一応あって、その中で自発的に踊っていらっしゃる。大野一雄先生の舞踏は蛇口みたいに、どこでもいつでもできるように、空間があれば彼は踊りだせる。音楽があっても、なくても。それは不思議なことです。最近ほとんど無意識に動いている。車椅子の時でもエルヴィスの音楽を聞くと彼の片手、片腕が動きだすんです。それは何か無意識の糸で動いているような感じがします。彼にはどういうふうになっているかよくわかりません。3、4年前に彼が僕にこう言ったんです。「最近、舞台上が上がって何か滑るかどうかという心配が出てきました。どうしようかな。やめましょうか」と。僕は「大野一雄先生、あなたはこのジャンルを創立した方ですから、大野一雄はすべての舞踏ですから、心配する必要はありません。」それを聞いて先生は、「いいですね、わかりました。よかった」とおっしゃいました。

不思議な日本人がいますね。100歳になって、こういう踊りをする人は世界中いないんですよ、大野一雄先生みたいな方はちょっと珍しい。どこで踊っても気持ちに通じる。日本の中だけでなく、ドイツでもベネズエラでもどこに行っても彼の舞踏は通じます。アーモスト大学に来た時は87歳、ツアーの最後の場所で、「あの方は1時間

半のパフォーマンス、もつでしょうか、あの歳で。」と皆が言っていたんです。そしたら先生が1時間半の踊りの後、アンコールをしました。皆が拍手をして興奮しました。もう一回、アンコールに出て、もうすごいなと、立ち上がって、拍手した。先生は、3回目も出た。皆を帰らせないんです。「私、もうちょっと踊りたい。」4回アンコールに出て、聴衆がまるでロック公演の時のようになってしまいました。それが終わって先生も楽屋に戻り、化粧を落としていましたが、みんな彼に会いたいものだから、長い列ができて。大野先生は45分の間、一人ひとりと抱き合ったり、握手をしたりして。その後、先生は「ジョン、11時半ですから何か食べたい」とおっしゃいました。ところが、その時間にはレストランが一か所しか開いてなかったんです。そこに行って10人くらいと一緒に食事をしてアパートに帰って、朝の2時までしゃべった。僕は先生に、「先生、悪いけど疲れていますから、寝ていいですか」と。すると、彼は「はい、どうぞ。」びっくりしました。

一度、彼に聞きました。「なんで先生は終わってもエネルギーがそんなにあるんですか。」彼は、「私は公演をする時、聴衆から一杯エネルギーを受け取っている。私もエネルギーを出している。終わった時、私が疲れていたらエネルギーを聴衆にあげすぎた。そのバランスをとれると、私は後で元気で、全然疲れない。そうするとうまくいったということです。」こういったことが（大野先生の舞踏を理解するための）一つのヒントになります、僕にとっては。

**司会：**ソルトさんはワークショップで舞踏を教えられたり、舞踏の世界では聖地のようなところですが、元藤燐子さんのアスベスト館で、「好色六十九代女」という舞踏の演出を手掛けられたことがあります。舞踏全般のことも大野一雄先生のことでもコメントとかご意見とか質問とかありましたら。

**質問 (2)：**ソルトさんは、大野一雄はどこに行っても、空間と音楽があればすぐに人にエナジーを与えて、人からエナジーをもらえるとおっしゃいましたが、そのような感性を身につけているということのポイントはどこにあると思われませんか？

**ソルト：**一度ジャパン・ソサエティ・オブ・ボストンのパット・ギブンスさんと大野さんと3人で

食事をしていた時に先生にこういう質問をしました。「先生は舞台にあがる時、どういうことで集中できますか？」彼はそれを聞いて、「ああ、簡単ですよ。数百人の死者に囲まれているから踊りやすいですよ。」彼女はびっくりしました。いつも死者が一杯彼と一緒にいるから何をしても踊れると。それはもうひとつのヒントですね。彼の人生も長いけれど、函館に生まれて子どもの頃、鉄道列車が初めて走り出した時です、彼は家で留守番をしていて、彼のお姉さんはお祭りに行ったのですね、そのとき、お手伝いさんが急に叫びながら家に飛び込んできて、「お姉さんが列車に轢かれて死んだ」と告げにきました。皆はびっくりして、彼も気が触れたようになって。5、6歳の時のことです。お姉さんが列車事故にあったのですね。死者のことは戦争に行く前から彼の中にいろいろあってね。それは彼の一つの原点だと思います。彼の舞踏の。

**司会：**原点が、そういうところにあるという話ですが。

**質問 (3)：**初めて舞踏を見て大野先生の舞踏がそうなのか、他の方もそうなのかわかりませんが、「これはなんなんだろう」というのが正直な感想でした。演劇とか映画とか芸術を見た時は何となくそれがどんなものか自分の口で説明できたり、理解できる感覚があるんですが、映像を見せていただいて「これなんなんだろう」と。ソルト先生が初めて大野先生の舞踏をごらんになった時、どんなことを感じられて、どう納得されたのか。「暗黒舞踏」という言葉が登場していますが、暗黒舞踏の由来、なぜ暗黒なのかということを知りたいです。

**ソルト：**大野先生を僕が初めて見た時の感想は、よく笑いました。彼を見る時、ユーモアを感じる。面白いところもあって。それだけでなく、いろんな感情が少しずつ変わっていく。グロテスクも、きれいも、醜いも、おかしくて、いろんな表情がダイアログ（対話）のように出てくる。それを見るのが面白い。肉体のシュールリアリズムのような感じがします。他の舞踏家は、また違うんです。それぞれの自分の魂の表現の仕方が違うので。いろいろご覧になってください。うまくない人なら自分のエゴイズムしか見られない。それに抵抗するかもしれない、舞踏を見ると。でも、うまい人は自分の心にスラスラと入っちゃうところ

もあります。

暗黒については土方巽が名付けたもので、舞踊という、ぶよぶよしているやわらかさがイヤで、かたいものをつくりたいと、舞踏の「踏む」ことの方が舞踊よりいいと思って、「舞踏」としました。「暗黒」の方の理由ですが、戦後、日本は、ぺちゃんこにされたところから始まったんですが、そういう部分もあります。また土方巽は暗いことを言うんです。彼は「自分は身体の不自由な人間として生まれた方がよかった」と気づいた時、それが舞踏の最初の一步だったと。もう一つは「私の大好きな3つの病気は性病と、ライ病」とか。好きな病気を考える人も少ないと思いますが(笑)、暗黒の暗さとか。今は何もないところからゲリラのように、お金をもらってやるのではなく、人を驚かす、自分を表現するだけでいいと思っていて、それがだんだん洗練されてきて、公演で3000円とか、5000円とかするようになってきた。それは舞踏ではないんです。だから「舞踏は終わった」と言う人もいます、特に、最初から舞踏を見ている人の間では。そう思う人もいて、40年以上、50年近いですから、すでに伝統にもなっています。その中から舞踏の勢いのある時代は終わったという意見もいろいろあるんです。舞踏がこれからどうなるか。慶人先生の世代で終わるかどうか。マドンナのビデオの中で舞踏をやっているような人も現れていますが、それは舞踏とは言わない。ラスベガスのブルーメンというグループがあって、それも舞踏の影響がありますが。舞踏はいろんな意味で芸術に入るけど、「舞踏」という言葉はなくなる可能性もあります。他のジャンルの人々が舞踏の要素を自分のジャンルの中に取り入れていくことがあるでしょうが、そのひとたちはもうそれを「舞踏」とは言わない。そういう世代も生まれてきて、やっている人は大野一雄、土方巽の伝統的な舞踏とは違う。私たちがやっていることは違うという人もいて、舞踏はこれからどうなるかということも含めて、面白い現象だと思います。

\*\*

これは日本の貢献の一つで、100歳になった方が日本を代表することはすばらしいことで、今日、ごらんになったように、老人ホームの人たちより大野先生の方が年上だと思います。彼より年上の人はいませんでした。それから、女装して踊るのは西

洋人には理解できなかった。「彼はゲイではないか?」「いえいえ、子どもも孫も曾孫もいます。」「そうか」と皆。こんがらがっちゃうんだけど。私は彼を「生き仏」だと思っています。大好きです。

終わる前にお礼を言わないといけません。村上学部長、矢野先生、田口先生、萩原さん、WOTの小松さん、小塚さん。そして聴衆の皆様、心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

司会：ソルトさんのお話のように、この企画は学生支援センターWOTの小松薫さんと小塚さんにお世話になりました。文化情報学会の会長の村上先生以下、同志社女子大学前学長の児玉実英先生も来られています。有名なホラー小説家の遠藤徹さんもおいでになっています。ありがとうございます。今日のパフォーマンスは、この場に来ていただいた皆さんのおかげだと感謝しております。どうもありがとうございました。ソルト先生、萩原健次郎さん、どうもありがとうございました。本日はこれで終わらせていただきます。



ジョン・ソルト博士

2007年9月にはコレクションの規模ではニューヨークのメトロポリタンにつぐ Los Angeles County Museum of Art (LACMA) において“99 Years of Japanese Avant-garde Art on the Wall”と題された講演でなぜ日本の戦前の前衛芸術がアメリカで正当に紹介されないのかを論じアメリカ人の聴衆に衝撃を与えたことでも有名。(literatureandarts.com 参照) 1999年にハーバード大学・アジアセンターから出版された著書、『意味のタピストリーを細断する——北園克衛の詩と詩論(1902-1978)』が田口哲也監訳で2008年に思潮社より翻訳出版される予定である。